

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520776

研究課題名(和文)文字瓦データベース構築と文字瓦の生産からみた地域社会の研究

研究課題名(英文) Database construction of the tile which character was written and Study of community that captures from the production of the tile which character was written.

研究代表者

山路 直充 (Yamaji, Naomitsu)

明治大学・文学部・兼任講師

研究者番号：50468823

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：全国出土の文字瓦を集成した結果、文字瓦が生産された目的は、生産、供給、負担、銘文、落書・習書であることが明らかになった。とくに、文字瓦は関東から東北地方で多く生産され、その目的は官衙や寺院造営における、生産と負担に関連して生産された。この地域的な偏りは、地域特有の情報伝搬のあり方を示しており、古代国家の地域の実情を示している。文字瓦は手工業から地域の実情をしる格好の資料である。また、研究のまとめるにあたり、その参考とするためにシンポジウム「日本古代における生産と記銘」開催し、考古学と文献史学から、生産に対する記銘の意味を検討した。

研究成果の概要(英文)：As a result of having collected the ancient tile which character was written excavated from Japan, as for the cause that the tile were produced, it was revealed that it was 1:production system, 2:supply systems, 3:burden for production cost, 4:inscription, and 5:scribble. Particularly, the many tiles were produced in the Tohoku district from the Kanto district. Most were produced in conjunction with production and burden for production cost in the building of a government office and the temple. Such regional deflection shows the way of the spread of special information in the local and shows local fact in the ancient nation. The tile is a suitable data knowing the local fact from the handicraft manufacturing. In addition, I held a symposium (Significance of Inscribed Materials in the Production Systems of Ancient Japanese) to compile a study. At the symposium, archeology and a historian examined about production system and inscription.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学 文字瓦 古代の地域社会 記銘 生産 負担 資料論 データベース

1. 研究開始当初の背景

(1) 文字瓦の資料的位置づけ

文字瓦は記銘資料のなかでも、記銘が瓦の生産工程に関わる場合が多い。生産工程は瓦を観察することから復元できるため、文字瓦は文字資料と考古資料を結びつけるには格好の資料となる。研究開始当初の研究では、文字瓦の出土率・記銘率を重視して、工人の把握や瓦の供給の問題に取り組む研究が大きな影響を与えていた(上原真人 1984「天平12・13年の瓦工房」『研究論集』 奈良国立文化財研究所など)。

(2) 記銘内容の分類

記銘の内容は、以下のように分類されていた(上原真人 2002「奈良時代の文字瓦」『行基の考古学』 埴書房)。作瓦を記念して、年号や由来、作者などを記した銘文的文字瓦。工人の賃金支給や労務管理など、工房の経営にかかわる文字瓦。製作した工房名やそれを管轄する役所名、あるいは供給先や使用場所など需給関係にかかわる文字瓦。造瓦を負担した土地や人の名を記した文字瓦。瓦を寄進するための仏教的作善行為 = 知識にかかわる文字瓦。落書・習書にかかわる文字瓦。このうち、はの負担形態の変更にすぎないため、改めて、文字瓦を生産工程にそって捉え、その意味を捉える必要に迫られていた。

2. 研究の目的

(1) データベースの構築

日本全国にどのような古代の文字瓦が存在するのかを把握するために、文字瓦の画像データベースを構築し、歴史資料としての文字瓦の特性を明らかにする。

(2) 文字瓦からの地域社会の解明

データベースをもとに、瓦に記銘された文字と生産工程の双方の視点から、寺や官衙の造営における生産と負担のシステム、瓦の発注主体者と寺・建立主体者の関係を解明し、窯業生産をとおして地域社会の実態に迫る。

3. 研究の方法

(1) データベースによる文字瓦の把握

平成16年～20年度文部科学省学術フロンティア推進事業「日本古代文化における文学・図像・伝承と宗教の総合的研究」で明治大学古代学研究所が収集した文字瓦の調査票6500点と参考文献のデータベース化と全国に構築した研究協力者の協力のもと、補足調査をおこない、全国の文字瓦の概要を把握する(参考文献のデータベース化は申請当初の計画には含まれていなかった)。

(2) 文字瓦の歴史資料としての活用

そのデータベースから得られた情報から、文字瓦の生産工程、文字記銘による地域社会の解明に利用できる資料を選択し、検討を加

え、文字瓦を歴史資料として活用する。

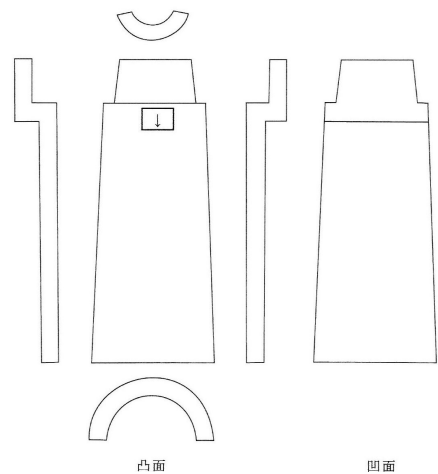
(3) 生産と記銘の検討

文字瓦のように記銘が生産に関わる資料を考古学・文献史学の立場から考察・討論を加え、学際的な見地から、記銘資料の歴史的な位置づけをおこなう。

4. 研究成果

(1) データベースの構築

データベースは、データベースソフト「ファイルメーカー」を利用して、画像つきデータベースと簡易検索のための「エクセル」仕様の表を作成し、明治大学古代学研究所ホームページに掲載した。これにより、文字の解文のみならず、文字の記名方法・記名位置も判明し、考古資料としての文字瓦の情報も網羅できるよう配慮した。



データベース画面
(画像と文字の記載位置)

本研究では、25 か国文字瓦 1568 点と関連する参考文献 389 点のデータベース登録をおこなった。当初の見込みより大幅に登録数が減じた原因として、基本データとなる調査票の校正に手間取ったことなどがあげられるが、当初計画していなかった、参考文献のデータベース化などをおこなったことも挙げられる。ただし、本研究が、研究拠点（明治大学研究所）を同じくし、文字瓦を研究課題の 1 つにあげる平成 21～25 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」「日本列島の文明化を究明する古代学の総合化研究」の研究をリードし、協力しながら、6500 点の調査票と関連する参考文献のデータベース化は完了した。

(2)文字瓦の出土傾向

本研究では、全国の出土文字瓦を全点網羅した訳ではないが、その出土傾向は、関東地方と東北地方、とくにそのなかの東山道諸国において、一部の国府・国分寺に集中する傾向が認められる。また、畿内では、行基関連の大阪府堺市大野寺土塔、京都府大山崎町山崎院跡で出土が集中する傾向にあり、文字瓦の生産が地域的、縁故的に伝播する傾向が認められた。

記銘内容は、国郡郷名など行政単位、施設・官職（生産と納入関係それぞれ関わって記銘）、人名、数字、記号、絵画意味不明、その他、に分けられる。

(3)文字瓦の再分類

文字瓦の大多数は、焼成以前に記銘されることから、生産との関わりで捉える必要あり、文字瓦の分類はこの点を考慮した。

文字瓦は、生産。供給。負担。銘文。落書・習書、などの関連により生産され、焼成前の記銘は、基本的に、作業量の把握、作業への参加を示す意味で記銘され、記銘による勘検を前提としていた。

記銘方法は、箆書き。焼成前。指書き。焼成前。押印。焼成前。型押。焼成前。

筆書き。焼成後（焼成前の有無は不明）。

針書き。焼成後。とした。銘方法で多数を占めるのは、箆書き、押印、型押、であるが、一造営の過程では、記銘は、箆書きから、押印・型押に変化することが傾向として認められる。

(4)文字瓦生産の伝播とその原因

関東地方、東北地方に顕著に認められる地域的な文字瓦は、おもに国府・国分寺で多く認められる。その原因は、地域における負担の表記であった。負担の原因には諸説あるが、本研究では、税（とくに雑徭）の代納というシステムで負担したと考えている。

ただし、そのシステムは、古代国家の税制が確立する以前において、千葉県栄町龍角寺の文字瓦のように、古墳時代以来の地域の負担体系のなかで確立されたものであり、雑徭

をはじめ、地域社会での多様な収奪関係を前提に、古代国家の税のあり方を捉えるべき認識をもつに至った。

また、縁故的な伝播では、行基関連の文字瓦のように、知識を目的として生産され、地域的な伝播が制度を前提としていることに対して対照的な伝播傾向を示す。

税を天皇に対する仕奉・貢納として捉えてみると、知識の概念に近接する部分も生じ、今後の課題となる。

また、

(5)工人名記銘の特質

工人名記銘については、恭仁宮造営の西山瓦屋生産の文字瓦が著名だが、8 世紀の宮都に供給する官営公募の場合、皇后宮職系統の瓦屋以外は、生産に関わる記銘はおこなわれない。西山瓦屋の瓦屋生産の瓦は、非常に丁寧な作りであり、恭仁宮造営のために組織された新たな工人組織のもとに産された可能性が高い。そのため、労務管理が徹底し、例外的に工人名が記銘され、労務管理のあり方は一般化できないと考える。都の瓦生産は、基本的に無記銘の瓦が多数を占めるので、工人の作業量は、別の方式で管理されていた。

労務管理のため、まとめて工人名を記銘することは、文字瓦のなかでも、珍しく、特異な労務管理であったことがわかる。

(6)記銘内容と文献史料との対比

文字瓦の記銘内容のあり方が、文献史料や同じ記銘資料でも税の荷札木簡と異なる場合があり、記銘資料から記銘内容を検討する場合、文字資料のみならず、記銘対象資料にも配慮が必要になる。

神奈川県小田原市千代廃寺から出土した「大伴五十戸」銘軒丸瓦の年代は、「五十戸」の記銘からすれば、680 年代となるが、軒丸瓦の文様・製作技法、生産窯での土器との共伴関係から、8 世紀初頭の年代が想定できる。他の「五十戸」記銘の文字瓦（大阪府柏原市高井田廃寺出土、栃木県那珂川町那須官衙遺跡出土）の年代も、7 世紀代には限定的できず、尾張産の 8 世紀初頭の複数の須恵器にも「五十戸」記銘が確認できた。

文献史料や税の荷札となる木簡と異なり、地域社会での「五十戸」呼称は、「里」表記の制度的な変化より遅れていたことがわかる。文献で構築された年代と実態の資料の年代の乖離を導くことで、その乖離の背景にある地域支配の実態を示すことができる。大宝令の施行以降、数年をかけて「里」表記が地方に浸透したことは、7 世紀末から 8 世紀初頭における法令の地域への進達と捉える一事例となる。

今後、記銘資料において、記銘内容（文字）導いた年代と資料自体の年代から導く年代に齟齬が生じた場合、記銘内容の年代に資料の年代を符合させるだけではなく、その違いを従分認識して、年代の齟齬を検討すべき

という課題が得られた。

(7)地域支配と多賀城造営についての考察

多賀城創建期の文字瓦を分析することで、多賀城の造営が関東地方と陸奥国に負担を求めていたことを明らかにした。

その負担の実態は、関東地方では東海道と東山道諸国、陸奥国では石城国領域、石背国領域、黒川以北十郡に分割して、分担させていた。按察使の管轄とは異なり、海道・山道を基本として、陸奥国内外の差、多賀城北方という地理的な分割によって、地域が分割されていたことがわかる。

ただし、その地域も、多賀城創建期の時期によって生産費用を負担した国や地域に違いあり、そのことが、地域を考える鍵になる。

創建期当初に生産された、「今」銘文字瓦は、宮城県多賀城市山王遺跡出土の針書き土師器蓋の記銘から、「今」が陸奥国行方郡の山部氏を示すことが判明した。「今」銘文字瓦が生産された時期は、下総国を示す「下」、常陸国を示す「常」銘文字瓦が生産され、そのため、「今」銘文字瓦が生産された時期であり、国に瓦の生産費用を負担させていたことから、「今」の記銘は石城国併合後の負担のあり方を示している。

多賀城創建の経緯を鑑み、「今」銘文字瓦から石城国併合は、722年(養老6)閏4月~7年秋季であり、多賀城碑に記銘される「神亀元年」は多賀城政庁の実質的な着工の年となることを想定した。

記銘内容の検討により、瓦という建築資材の生産を通して、造営の経緯も推定できるのが、文字瓦の資料的な特質でもある。

(7)シンポジウムの開催

本研究において、生産と記銘の関わりは大きく、今後への問題提起を含め、現状の認識を考古学と文献史学双方の立場から、検討するシンポジウムを開催した(開始浴び 2013年6月8・9日)。

シンポジウムの発表者とタイトル内容は以下の通りである。

渡辺 一(大東文化大学)「須恵器生産と記銘 記号を中心に」:文字瓦生産以前におこなわれていた須恵器生産における製品への記銘について。

大川原竜一(高志の国文学館)「生産と部民(高志の国文学館):須恵器生産と三輪部との関わりについての文献史学からのコメントを中心に」。

垣中健志(東京大学大学院)「『浄清所解』の基礎的研究」:文書の解釈と土器生産とジェンダーが関わりについて。

奥村茂輝(大阪府文化財センター)「官営瓦工房と記銘 奈良山における瓦生産」:瓦生産における無記銘と官司名記銘の位置づけ。

溝口優樹(國學院大学大学院)「大野寺土塔出土の文字瓦」:在地で編成された工房で

の記銘。知識で造営に参加した記銘者と生産との関わり。

十川陽一(慶應義塾大学)「生産体制と記銘」:生産の運営・監督する立場からみた、製品への記銘。

服部一隆(明治大学)「調庸布と記銘」:貢納における製品への記銘。生産者と記銘者との関わり。

亀谷弘明(早稲田大学)「荷札木簡と記銘」:貢納に関連して木簡の記銘。

矢越葉子(御茶の水女子大学大学院)「経巻書写と記銘」:官営工房研究では必須の写経事業における記銘。

山路直充(市立市川考古博物館)「文字瓦からみた瓦屋」:瓦生産における記銘システムについて。

有富純也(東京大学)「文字記銘と東アジア世界」:文字使用についての総論

シンポジウムの内容は多岐にわたるが、生産における製品への記銘が習書・落書以外は製品と文字を対応させ、勘検する意味に捉えることは、意見が一致した。

しかし、瓦生産と結びつきが強い須恵器生産における記号については、焼成時のリスク回避のため記銘されたという見解が示され、文字瓦の労務管理による工人名記銘とは異なっていた。

ただし、今後の検討次第では、

(8)まとめと今後の課題

文字瓦は、墨書土器、木簡、漆紙文書のように、製品に記銘することにより、意味を帯びるのではなく、生産工程で記銘するものが多数を占めることから、生産との結びつきが強い。

とくに、瓦生産を瓦生産における4者(発注者、経費負担者、製作者、納入先の寺院や官衙の建立主体者)の関係が、地域社会の構造を解明する上で有効な視点になることが判明した。瓦が地域社会に受容されることでおこる変化を文明化と捉え、生産に関わる4者の関係をモデル化して、古代地域社会の文明化の過程を考察することが必要になる。

このためには、文字瓦データベースの拡充は必要である。日本最多の出土量を誇る武蔵国分寺関連の文字瓦は、4,600点ほど(東京都国分寺市教育委員会所蔵の武蔵国分寺跡出土の2,000点、古代出雲文化センター所蔵の平塚運一コレクションの資料1,000点、東京都稲城市瓦谷戸窯跡出土の300点、埼玉県入間市・狭山市東金子窯跡群出土の300点など)未収録のままであり、今後の大きな課題である。

また、文字瓦は東アジアでは、中国北朝の工人銘、百濟の五方五部銘の文字瓦が著名であり、これらの文字瓦の成立と日本の文字瓦の成立を比較検討することで、東アジアの地

域性が検討可能となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

山路 直充、「大伴五十戸」と記銘された軒丸瓦、駿台史学、査読有、137号 2009、pp. 49 - 72

山路 直充、ヤマトタケルの江戸川渡河伝説、市史研究いちかわ、査読有、創刊号、2010、pp.

山路 直充、松本太郎、平成23年度発掘調査報告 下総国分寺跡第20次調査区の再調査(1)、市立市川考古博物館館報、査読無、39号、2012 pp. 28 - 30

山路 直充、松本太郎、平成23年度発掘調査報告 下総国分寺跡第20次調査区の再調査(2)、市立市川考古博物館館報、査読無、40号、2013、pp. 30 - 40

山路直充、瓦の編年、おわりに 五斗蒔瓦窯1期の瓦生産、明治大学古代学研究所紀要、査読無、22号、2013、pp. 87 - 91

〔学会発表〕(計12件)

山路 直充、断想 瓦からみた東日本の一姿相、国土館大学考古学会、国土館大学 2009

山路 直充、大和の文様、東へ - 瓦当文様の伝播と関東・坂東・陸奥 -、日本考古学協会76回総会、国土館大学、2010

山路 直充、考古遺物としての墨、奈良女子大学古代史・環境史プロテオミクス研究創成事業「シンポジウム墨」、奈良女子大学、2010

山路 直充、高橋虫麻呂と古代東国のミチ、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本列島の文明化を究明する古代学の総合化研究」、明治大学、2010

山路 直充、交通から読む『常陸国風土記』、糸里制・古代都市研究会、奈良文化財研究所、2011

山路直充、アルプスの廃寺 天狗沢窯出土軒丸瓦の祖型をおって、古代交通研究会、明治大学、2011

山路 直充、更級日記にみる受領の移動、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「日本列島の文明化を究明する古代学の総合化研究」、明治大学、2012

山路 直充、幻の大寺真行寺廃寺とは、企画展「掘り出された山武の古代 真行寺廃寺」講演会、山武市、2012

山路 直充、河内西琳寺の創建、シンポジウム「畿内における飛鳥白鳳寺院とその源流」、科研基盤(A)「文明移動としての『仏教』からみた東アジアの差異と共生の研究」、早稲田大学、2012

山路 直充、寺の空間構成と国分寺 寺院地・伽藍地・付属地、第8回全国国分寺サミット in 大宰府、大宰府市、2012

山路 直充、文字瓦からみた瓦屋、本科学研究費による公開シンポジウム「古代日本の生産と記銘」、明治大学、2103

山路 直充、国分寺、明治大学博物館公開シンポジウム「東アジアからみた東大寺と国分寺」、明治大学、2013

〔図書〕(計8件)

山路 直充 他、竹林舎、王朝文学と交通 630

山路 直充 他、六一書房、房総の考古学、2010、261

山路 直充 他、吉川弘文館、『国分寺の創建 思想・制度編』、2011、386

山路 直充 他、山武仏教文化研究会、論集『幻の大寺真行寺廃寺』 2013、103

山路 直充 他、吉川弘文館、『国分寺の創建 組織・技術編』、2013、452

山路 直充 他、八木書店、古代山国交通と社会、2013、400

山路 直充 他、同成社、技術と交流の考古学、2013、734

山路 直充、他、塙書房、日本古代の国家と王権・社会、2014、534

山路 直充 他、明治大学、日本古代の生産と記銘、2014、160

〔その他〕

ホームページ等

明治大学古代学研究所

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

山路 直充 (NAOMITSU, YAMAJI)

明治大学・文学部・兼任講師・研究者番号：

5 0 4 6 8 8 2 3